

平成29年度の松江北高校がスタートしました。大社高校から小山理久校長をお迎えしてのスタートです。4月10日(月)に行われました始業式での校長先生の話をご掲載します。



校門に向かう赤山の坂の桜も咲き、鳥のさえずりも増え、春の息吹が感じられる季節となりました。皆さんは春休みをどのように過ごしたでしょうか？

春に関わる有名な春暁の漢詩がありますので最初に紹介しましょう。

春眠暁を覚えず、
处处、鳥啼くを聞く
夜来風雨の声、
花落つること知る多少ぞ



この詩は、唐の孟浩然の詩で春の眠りは心地がよく、夜が明けたのにも気づかないほどです。外からは鳥のさえずりが聞こえ、天気もよさそうだ。そういえば昨日の夜は風雨の音がしていたなあ。いったいどれほどの花が散ってしまったことだろうか。

何か春になって気候もよくなり、寝坊しちゃうぜという詩のように思われています。しかしながら、起きると鳥のさえずりが聞こえ、天気もよさそうだ。そういえば昨日の夜は風雨の音がしていたなあ。いったいどれほどの花が散ってしまったのだろうと、時間的な推移を朝起きたところで考えています。そして、春のこの天気の良い日何をしようかなと考えているようです。

この漢詩にあるように春は様々なことを始める季節です。新学期を迎え、明日には、新入生が大きな希望と期待をもって入学してきます。3年生は最上級生として学校生活をリードする学年に、また進路を決定する学年となります。また、2年生は、後輩を迎え、手本となる学年になり、進路志望をいよいよ決めていくこととなります。みなさん、この1年間を大切に有意義に頑張りましょう。

そのためには、努力をかさねていくことこそ大切です。そのためには目標がなければなりません。みなさんには、「地域社会の中核として活躍したい」、「日本または世界で活躍したい」、「仕事のできる人間になって社会に貢献する人になりたい」など「将来こんな自分になりたいなあ」とか、「将来自分はこうありたいなあ」と考える自分があります。これを心理学では「理想自己」といいます。みなさんは「理想自己」を持っていますか。もし、まだ持っていない人は早く「理想自己」を持って欲しいと思います。

「理想自己」を思い描くために象の話をしてしまおう。エレファ

ントの象の話です。ある国では、象は、ロープで杭につながれてじっとしています。象には、杭を引っこ抜く力があるのに、その力を発揮して逃げない。なぜでしょうか？理由は簡単。「自分にはたいした力がない」と思い込んでいるから杭を引っこ抜いて逃げないのです。象は子供の頃、鎖で杭につながれて毎日を過ごします。小さいのでたいした力がありません。だから、杭を引っこ抜くことはできません。そして、象は、大きくなってからも、その思い込みにとらわれ続けます。調教師はそれを知っているから、鎖のかわりにロープを使って象を杭につながぎ止めます。大きな象にとって杭を引っこ抜くことくらいはたやすいはずですが。しかし、象は「自分には、たいした力がない」と思い込んでいるので、何もせずじっとしているのです。

このことは、我々にもあてはまるのではないのでしょうか。「自分にはたいした力がない」と思い込んで、日々を過ごす。自分で自分の限界を設けて、本来の力を存分に発揮できずにいる人も多いのではないのでしょうか。みなさんには、とても大きな能力があります。それを発見して伸ばすことが大切です。「自分にはたいした力がない」という思い込みから自分を解放し、すばらしい能力と可能性に気づいてください。そうすれば、自分を信じることができます。それは、目標を達成する強い力となります。「自分を信じる」とことと「自分を過小評価してはいけない」ということです。

そして、心理学では今の自分の状態を「現実自己」といいますが、今の自分を「理想自己」に近づけるように努力することが必要です。明確な目標を持ってそして、「努力を重ねる」ことが必要です。

目標を達成できないのは、大抵の場合、不断の努力を怠るからです。あきらめずに目標に向かって突き進み続ける決意をする必要があります。

目標を達成しようと思い、目標を達成する方法を知っているにもかかわらず、目標を達成できない。それはなぜか？不断の努力を怠るからです。皆さんの目標達成は、努力した量に比例します。毎日、どれほど小さなことでもいいから、目標の達成に近づく努力をしよう。実際に成し遂げた小さなことは、思い描いただけの偉大な計画よりもすばらしい。何かをすれば、必ず何らかの結果が得られる。課題の達成に向けて積み重ねた努力の一つひとつが、結果という形を生むのです。

最後に、コミュニケーションのお話をしましょう。学校生活を送るなか、気の合う限られた仲間の中でのみコミュニケーションをとっていたりしていませんか。また、コミュニケーションをとっているつもりが実際は自分の思いを一方向的に伝えているに過ぎないということはありませんか。これからは、お互いに理解を深め、共感しながら人間関係やチームワークをつくって欲しいと思います。様々な問題や課題について対話をしなが

ら自らも深く考えながら、お互いに考えを伝え、深めあって解決していくコミュニケーション力を高めてほしいと考えています。そこで、このコミュニケーション力の育成を本年度の本校の重点目標の一つにしました。学校や家庭で相手を思いやる心は決して忘れてはなりません。

さて、心理学者のアブラハム・マズローは、「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生きものである」と仮定し、人間の欲求を五段階の階層で理論化しました。

一つ目は生理的欲求、すなわち食事・睡眠・排泄等の本能的な欲求です。二つ目は安全の欲求、つまり安全、良い健康状態の維持、事故防止などの欲求です。三番目の欲求は「所属と愛の欲求」で四番目は「承認(尊重)の欲求」で、五番目は「自己実現の欲求」です。

三番目の「欲求所属と愛の欲求」は、情緒的な人間関係・他

者に受け入れられている、どこかに所属しているという欲求です。四番目の「承認(尊重)の欲求」とは、自分が集団から価値ある存在と認められ、尊重されることを求める欲求です。重要なのは、自分の心の中にある「他者に受け入れられたい」という欲求や「集団から価値ある存在と認められ、尊重されたい」という気持ちは学校生活をともにする級友や同じ部員のみならずも持っているということです。ですから、級友や同じ部員を受け入れたり、存在を認め、尊重したりするように努めなければなりません。それがクラスや学校の雰囲気を作っていくことになると思います。自分だけがそうした欲求を満ちたいと思うのは甘えの構造でしかありません。今年度GAUTSを持って皆さんと頑張りたいと思いますのでみなさんもよろしくお願いします。

校長 小山理久

入学によせて～親子の距離感覚～

1年学年主任 田中伸洋

新入生の皆さん、そして保護者の皆さん、あらためて本校へのご入学おめでとうございます。まだまだ、新しい生活リズムに慣れない所や高校での学習へのとまどいもあり…、といった日々の状況ではなかるうかと思えます。私事になりますが、娘



がこの4月に中学校に入学しました。その時感じたのは、これからわが子との距離感をどうとっていくべきか？という漠然とした疑問でした。もう小学生じゃないんだから…、と

いって突き放すにはまだまだ幼いですし、さりとて、もう、親とべったりという年頃でもなく、家庭よりも、外の世界との接点があふえ、それにつれて親から見えにくい部分も増加しています。精神的にも移ろいやすい年頃ですから、日々、同じように接していればいいというわけにもいかず、悩ましい日々を過ごしています。こうしてわが事を振り返ってみると、あらためて高校生という年頃は、こうした親子の距離感覚において、もっと難しい部分を抱えているように感じます。高校生は外見적으로는大人とほとんど変わりなく、本人たちの中にも、も



う子ども扱いされたくないという自尊心も芽生えてきていると思えます。その一方で、内面的には、まだまだ不安定で揺れ動いている部分があり、社会的責任を負うにも判断力が未熟な部分があります。周囲の大人から影響されやすい部分もあり、情緒的にも安定しているとは言いがたい部分も持っています。それだけに、彼らが適切な判断をして行動していけるように周囲の大人の適切なアドバイスがまだまだ必要です。そのためにも、保護者の皆さんには、とにかく家庭において、学校のこと、部活動のこと、友達のこと、進路のこと等しっかり話をしてほしいと思います。そして、生徒の皆さんには、自らの社会的責任をしっかりと自覚しつつ、一方で自分の未熟さに謙虚に目を向けられるようなしなやかさを兼ね備えてほしいと思います。本校での3年間が、新入生の皆さん、そして保護者の皆さんにとって、あらたな旅立ちに向けてのかけがえのない時間となるように願ってやみません。最後に、谷川俊太郎氏の「いなくなる」という詩をご紹介します。

いなくなる
谷川俊太郎
わたしたちは
いつか
いなくなる
のはらて
つんだはなを
うしろでにかくし
おとうさんには
きこえない
ふえのねに
さわられて
わたしたちは
いつのまにか
いなくなる
そらからもらった
ほほえみにかがやき
おかあさんには
みえない
ほしにみちびかれて
『家族の肖像』
谷川俊太郎より